アンテベラム北部の黒人論

清　水　忠　重

Summary

The African-American Image in Antebellum North

Tadashige Shimizu

Antebellum northern clergymen such as William E. Channing and Alexander Kinnmont created the idealized African-American image which praised the African race for being mild, kind, honest and affectionate, and identified this race with the natural Christian. Mrs. Stowe's *Uncle Tom's Cabin* is the final masterpiece which completed this unusual image. This novel has two slave heroes: one is Uncle Tom, the other is George and Eliza. Distinguished by his religious and moral character, Tom becomes the so-called black Christ. Mrs. Stowe intended to criticize the inhumanity and cruelty of Southern slavery by idealizing the victim's nature. On the other hand, she let George and Eliza set off for Liberia at the end of her novel, which was a kind of propaganda novel of the American Colonization Society. Mrs. Stowe contended that the African-American's brilliant nature should be cultivated and exhibited in Africa, not in America, and insisted that in future Africa would have a special type of Christian civilization. While idealizing the African nature, she did not want this race to coexist with the white race and she sought to eliminate them from America. The two contrasting elements of anti-slavery and anti-African-American in her novel, represented the political view of the antebellum northern majority.

はじめに

1836年にマリア・チャイルドは『アフリカ人と呼ばれているアメリカ人のための訴え』と題する著作を著しているが、これによると1830年代の北部社会に独特の黒人イメージが形成されていたことがわかる。この著作でチャイルドは、「アフリカ人とその子孫に関してわれわれがどのような義務を負うべきかを決するには、まず最初かれらが人間（human beings）であるのかないのか、かれらが他の人間と同じような改善能力を備えているのかいないのかという点をはっきりさせなくてはならない」(1)と述べた上で、「第6章　黒人の知性（Intellect of Negroes）」、「第7章　黒人の道徳的性格（Moral Character of Negroes）」という二章を設けて、黒人の精神的資質を論じている。そして、北部白人が黒人の「知性」面での劣等性は認めつつも、「道徳的性格」に関しては、むしろ好意的に評価していることをつぎのように指摘している。「黒人は本性上、知性の点で劣っているという見解が、白人たちのあいだであまねく広まっている。しかし黒人が他の人種に比べて邪悪であるという考えは、そんなにひろく広まってはいないように思う。じつのところわたしは、黒人の賛美者では全然ないようなひとびとが、黒人は親切な感情と強い愛情を顕著にもちあわせていると主張するのを耳にするのである」(2)、と。本稿では、アンテベラム（南北戦争前）期の北部に登場するこの特殊な黒人像を取り上げて、これがどのようなかたちで創造されていったのか、そこにどのような意味が込められていたのか、なぜこの時期こうしたイメージが形成されることになったのかという歴史的な背景について考えてみたい。

1　チャニングとキンモント

マリア・チャイルドが指摘したのは北部社会に漠然と広まっていた黒人イメージであるが、このイメージをベースにして、これに明確なかたちを与え、理想化された黒人像を創り上げる上で大きな貢献をした人物が二人いる。ウィリアム・E・チャニングとアレクサンダー・キンモントという二人の牧師である。かれらは黒人の資質を描くに際して、mild, gentle, kind, affectionate といった形容詞を多用し、黒人を子供のように純朴な心をもった人種、親切で正直で心の優しい人種、穏和で情愛に富んだ高潔な人種、忍耐強く、寛容な人種、奉仕の精神に富んだ献身的で自己犠牲的な人種等々として描き、黒人の道徳的、宗教的資質の優秀性を説いて、その高邁な心の資質を賛美した。アンテベラム期の北部にあらわれたこの過度に美化された黒人像は、やがてストウ夫人のベストセラー小説『アンクル・トムズ・ケビン』(1852年）の主人公アンクル・トムにおいて集大成されることになる。ここではまずチャニングとキンモントの所論をとりあげて見ておこう。

チャニングはボストン在住のユニテリアン派の牧師で、ストウ夫人の父親ライマン・ビーチャーと双璧をなす宗教家であり、当時の北部社会ではもっとも影響力のある人物であった。1835年に著した『奴隷制』のなかでチャニングは、「あらゆる人種のなかでも、アフリカ人はもっ

とも穏和で、もっとも愛情に心を動かされやすい人種である」と述べて黒人の資質を称賛し、「かれを鎖につなぎ止めなくてはならない理由」などあるであろうかと問いかけて、奴隷制を批判した[3]。チャニングは1840年に著した『奴隷解放』では西インド諸島の奴隷解放を引き合いに出して、つぎのように論じた。西インドでは当初、奴隷の解放は復讐と虐殺と欲望のほとばりしを生み出し、大混乱を引き起こすであろうと想定されていた。ところが実際に起こったのは、それとは逆の事態であった。解放は黒人たちから感謝の念をもって迎えられ、解放奴隷たちは教会に集まり、祈りと賛美歌を口にした。そして、喜びが鎮静化すると、黒人たちは再び労働へともどっていった。チャニングは西インドの経過を紹介した上で、黒人資質の「高貴な要素」[4]、とくにその宗教的な資質に着目してつぎのようにいう。白人たちのあいだに「もっとも強力に根を張っている『決闘法』は、キリストの人格と言葉に正面から敵対するもの」であり、白人の資質は「キリスト教の精神とは相反する資質を顕著に持っている」[5]。これに対して、「アフリカ人は柔和で我慢強く、愛情深い美徳の胚種をわれわれよりもずっと豊かに持ち合わせている」。わたしは西インド滞在中、解放奴隷たちの進歩向上するさまを実際に目の当たりにして大きな感銘を覚えたものである。また、西インドのいたるところで「人間本性のなかでももっとも高貴な資質であるかれらの宗教的傾向について耳にした」ものである[6]。「黒人はもっとも穏和で優しい（mildest, gentlest）人種である。…黒人の資質は愛情に富んでおり（affectionate）、ものごとに容易に感動しやすい。したがって黒人は白人よりも宗教的な感受性が豊かである。ヨーロッパ人種はこれまで、勇気、進取の気性、創意工夫の才の面では優れたものを示してきた。しかしながら、キリスト教がとりわけ愛でる気質に関していえば、ヨーロッパ人種はアフリカ人になんと劣っていることであろうか」[7]。チャニングはこのように宗教的感性ゆたかな黒人の「心の資質」を称賛した上で、「わたしはアフリカ人種が文明化するならば、活力、勇気、知的独創性といった点ではわれわれ白人よりも劣るかも知れないが、しかし愛情、静穏、優しさ、満足といった点ではわれわれ以上のものを示すであろうと期待している」[8]と述べて、黒人が将来、理性の上に築き上げられた白人文明とは異質のタイプの優れた文明を作り出すであろうことを予測した。また黒人の美質を踏まえた上で、われわれは「人種のうちでももっとも優秀な人種をくびきにつないでいるのである」[9]、「このような人種を鎖につないでおかねばならないような理由などない。かれらを無害にするのに、鎖などいらない」[10]と主張して、南部の奴隷制を批判した。

チャニングが北東部のボストンでこうした黒人論を展開していたころ、北西部でもアレクサンダー・キンモントという人物がおなじような作業を押し進めていた。キンモントはオハイオ州シンシナティ在住のスウェーデンボルグ派の牧師で、かれは1837年から38年にかけておこなった一連の宗教講演の中で、チャニングとおなじような黒人賛歌を謳いあげた。かれの講演は1839年には『人間の自然史に関する12の講話』[11]と題して出版されている。

この宗教講演のなかでキンモントは白人の資質と黒人のそれとを鋭く対置して、つぎのように描いた。白人は生まれつき支配欲が旺盛で闘争的なので、資質の上からいって真のキリスト者になることはできない。すなわち、キリスト教の説く美徳が白人の心の中に根づくにはやや

無理がある。他方、「黒人の中にはヨーロッパ人の場合よりも、子供のような資質、純真素朴な資質が豊富にそなわっている」(12)。また自己犠牲的な資質も豊富にもちあわせており、生来キリスト教に向いているといえる。「キリスト教の甘美な優美さはあまりにも熱帯的で、か弱い植物なので、白人の精神という土壌の上に生育することはできない。それが植え付けられて、自然に美しく成長するにはある特定の人間本性が必要なのであるが、そうした本性の特徴をひとは黒人のうちに見いだすことができる」(13)。すなわち、黒人こそ生来のクリスチャン（a natural Christian）というべきである、と。

キンモントはこのように述べて人種資質の差異を強調し、黒人の道徳的宗教的資質の卓越性を称える。そして、この主張をさらに押し進めて、理性に秀でた白人が科学文明、技術文明を発展させたのに対して、黒人は科学文明とはちがったタイプの文明、道徳的宗教的な色彩の濃い文明を生み出すであろうとして、黒人のもつ独特の可能性をつぎのように予言する。

「もしも白人が、その早熟な才能と生来の迅速な活動と技術への適性に示されているように、神の英知（the divine wisdom）の光り、いやもっと適切にいえば、神の科学（the divine science）を反映するように運命づけられているとするならば、われわれは、遅咲きではあるが遥かにいっそう高貴な文明がその前途に待ち受けている黒人を羨むべきではなかろうか。より穏和でより優しい美徳を実践することによって、慈悲と慈愛という神の属性(the divine attributes of mercy and benevolence)の光輝を反映している黒人を羨むべきではなかろうか」(14)。

キンモントは以上に加えてさらに黒人植民の思想を打ち出し、黒人はアフリカに送還されるべきであり、アフリカにおいてその能力を発揮すべきであるという主張を展開する。すなわち、おのおのの人種はそれ固有の資質を、神の定め給うた本来の居住場所で開花させるべき運命を担っているのであり、黒人の美質と文明は祖国アフリカにおいて開花させるべきである。「アフリカ大陸は黒人の生家であり、かれの将来の栄光と文明を発展させるべく宿命づけられた最適の場所なのである」(15)。将来アフリカに出現するであろう黒人文明を、キンモントは白人の科学文明、技術文明と対比させて、つぎのように描く。

「幾時代かが過ぎて黒人文明の時代がやってくるとき、かれらはその祖国に、われわれのような別個の人種にはいまのところ想像もつかないような、なにか非常に特殊で興味深い性格の特徴を示すことになるであろう。それはかならずや、独特なタイプの文明であることであろう。あえて言えば、それは技術よりもある種の美質の顕著なもので、科学によって特色づけられ装飾されているというよりも、新しい慈愛に満ちた神学によって高められ洗練された文明、すなわち天国の光りを反映し、白人の知性がこれまで示してきたものよりももっと完璧で愛情のこもった文明であることだろう」(16)。

チャニングとキンモントの方向づけのもとで打ち出されたこの理想化された黒人像は、じつは虚構のものであった。北部人はこうした黒人像を創り上げ、それに支持を与えつつも、黒人に対してシンパシーをもっていたわけではなかった。むしろアンテベラム期の北部社会では、黒人（自由黒人）はありとあらゆる面で人種差別にさらされていた。自由黒人は北部の町の片隅にある「黒人の丘」、「ニューギニア」、「リトル・アフリカ」などの特殊なゲットー（黒人居

住地）に押し込められて、白人社会からは隔離されていた。この差別と隔離は駅馬車、鉄道、汽船などの乗り物や、ホテル、レストラン、劇場、病院、墓地など、ありとあらゆる分野にも浸透していた。自由黒人は教会で祈りをおこなう場合にも、「黒人専用座席」なるものをあてがわれて、白人の座席から隔てられていた(17)。

こうした人種差別の実態があったにもかかわらず、アンテベラム期の北部で美化された黒人像がつくりあげられることになったのは、セクショナリズム（南北の地域利害対立）の激化が関係している。北部人がアンクル・トム型の黒人像を歓迎したのは、黒人に対するシンパシーの念からではなく、南部奴隷制を批判するための必要性からであった。言い換えれば、アンクル・トムは黒人に対する好感の所産ではなく、南部に対する敵対感情の所産であった。アンクル・トムはいわば奴隷制を叩くために創り上げられた黒人であったといってよい。

この点を理解するためには、従来から出まわっていた黒人像についても見ておく必要がある。建国期以来の黒人イメージは、いわゆるサンボ型かナット・ターナー型かのいずれかであった。サンボ型は黒人を陽気で間抜けな人種、卑屈で無気力で怠惰な人種、迷信にとらわれやすい低能な人種、平気でうそをつき、盗みを働く不道徳な人種、模倣好きで臆病でお人好しな人種といったイメージで描くもので、旅まわりの芸人たちが顔に墨（焼いたコルク）を塗り、黒人の滑稽な仕草をわざとこれみよがしに演じてみせたあのミンストレル・ショーの黒人像に典型的に示されているものである。これに対して、ナット・ターナー型は黒人を恐怖の対象としてイメージするものであり、白人に復讐をたくらむ獰猛残忍な人種、反乱を画策する血に飢えた人種として描くものである。サンボ型とナット・ターナー型はイメージとしては正反対であるが、どちらも黒人を野蛮な劣等人種としてとらえ、マイナス・イメージでとらえているという点では共通している(18)。

この従来のイメージに対して1830年代に生み出された新しいタイプの黒人像、アンクル・トム型とでも称すべきタイプの黒人像は黒人資質を積極的に賛美するプラス・イメージのものであり、それはサンボ型やナット・ターナー型とは決定的に異なる性格のものであった。セクショナリズムの激化していくなかで、北部人は次第に南部の奴隷制に対して批判的な態度をとるようになったが、その場合、従来のマイナス・イメージの黒人像をもってしては奴隷制を効果的に叩くことはできなかった。奴隷制の非人道性と残虐性を攻撃しようと思えば、この制度の犠牲者である黒人が怠惰で卑屈な人種であったり、謀反をたくらむ凶暴な人種であったりしては都合が悪いのであって、奴隷制が「積極的な善」であるどころか、むしろ罪もない穏和な人種を抑圧する非人道的な極悪の制度であるということを説得的にいおうとすれば、どうしても奴隷制の犠牲者は善良で誠実な人種でなくてはならなかった。言い換えれば、奴隷制の犠牲者を穏和で誠実で利他的な人種に仕立て上げることによってはじめて、奴隷制がいかに善良な罪もない人種を抑圧し、虐待しているかを言い立てることができるのであり、またそうすることによってはじめて奴隷制糾弾の論理も十全の説得力をもってくるわけである。アンクル・トム型のイメージは奴隷制攻撃のためのイデオロギー的な武器として創り出されたものであった。トムは黒人へのシンパシーからというよりは、むしろ奴隷制批判という戦術的な観点から創り

上げられたものであって、その過度な美化は北部人の実感に根ざしたものではなかった。北部人は奴隷制に対して反対であったが、またそれと同時に黒人との混血や人種平等にも反対であった。

2．『アンクル・トムズ・ケビン』

チャニングとキンモントの黒人賛歌を受け継いで、これにみごとな肉づけをほどこし、一つの完成品を創り出したのがアンテベラム期最大のベストセラー小説『アンクル・トムズ・ケビン』である。この作品を取り上げるに先立って、まず作者ストウ夫人について見ておこう。彼女が生まれ育ったのはニューイングランドであり、父親のライマン・ビーチャー（Lyman Beecher）は全国的な知名度と影響力をもつ牧師であった。1832年、彼女はビーチャーがオハイオ州シンシナティに新設されたレイン神学校（Lane Theological Seminary）の校長に招聘されたのを機に、父親についてシンシナティに移住した。その後、夫のカルヴィン・ストウ（Calvin E. Stowe）教授がボードイン大学（Bowdoin College）に赴任することになったのを機に、1850年にふたたびニューイングランドにもどってきた。したがって、1832年から50年にかけての18年間をシンシナティで過ごしたことになる。もしこの西部での歳月がなかったなら、彼女のベストセラー小説は書かれなかったはずである。シンシナティはオハイオ河畔の町であり、当時オハイオ川は自由州と奴隷州をわかつ境界線をなしていたので、川ひとつ隔てて、この町の南側にはケンタッキーという奴隷州が控えていた。したがって、この町に住んでいると、ときおり逃亡奴隷がオハイオ川を渡って逃げ込んでくることもあったであろうし、そうした奴隷をとおして奴隷制に対する関心をかき立てられることもあったであろう。ストウ夫人は1833年には父親の友人トマス・ケネディという人物をたずねて、ケンタッキー州のペイント・リック（Paint Lick）という村を訪ねている。ストウ夫人が奴隷制の実態を目の当たりにしたのは、これが最初で最後であった。『アンクル・トムズ・ケビン』の中で彼女は、「南部を旅行したことのある人なら」[19]これこれのことをご存じであろうといった調子で、いかにも南部のことに精通しているかのように書いているが、彼女が奴隷州に足を踏み入れ、南部を旅行したのはじつはこの一度だけであった。小説の冒頭で彼女は物語の舞台であるアンクル・トムの小屋の所在地を「ケンタッキー州、P――町」として紹介しているが、要するに自分の知っている南部唯一の場所ペイント・リックに舞台を設定したわけである。

シンシナティは当時「西部のアテネ」と呼ばれており、ストウ夫人の一族はこの町の知的文化的サークルの中心をなしていたので、キンモントが1837－38年におこなった宗教講演を、彼女はたぶん聴いたはずである。そして、たとえ講演を聴きのがしたにしても、その翌年美しい装丁のもとに出版されたキンモントの『人間の自然史に関する12の講話』はシンシナティの出版界におけるメーン・イベントであったから、これが彼女の目に止まらなかったはずはない。いずれにせよキンモントの描き出した黒人像は、後年ストウ夫人が書くことになる『アンクル・トムズ・ケビン』のうちに濃い影を落とすことになる[20]。

『アンクル・トムズ・ケビン』は首都ワシントンの奴隷制反対派の新聞『ナショナル・イラ』

(National Era) 紙に、連載小説として1851年6月から52年4月にかけて掲載され、連載がおわる直前の1852年3月20日に二巻本として出版された。初版5000冊のうち、3000冊が初日に売り切れ、残りは翌日に売り切れた。一年間に120版を重ねたというから、じつに驚くべき売行きというほかない[21]。

『アンクル・トムズ・ケビン』の筋書きは、つぎのようになっている。そして、作者の黒人奴隷制論はこの筋書きの中に示されている。ケンタッキー州の善良な奴隷主であるシェルビィは、負債を返すために手持ちの奴隷のうちアンクル・トムとイライザをやむなく手放すことを決意する。しかし主人シェルビィと奴隷商人のはなしを立ち聞きし、自分が売られようとしていることを知った女奴隷のイライザは、子供をつれて逃亡し、カナダへと向かう。また、シェルビィのちかくの農場で奴隷となっていたイライザの夫ジョージも彼女のあとを追って逃亡する。しかしアンクル・トムは自分が逃亡すれば主人のシェルビィに迷惑がかかることを思って踏みとどまり、奴隷商人におとなしく身をゆだねる。そして転売されたあげく、最後はルイジアナ州のサイモン・レグリィという残忍な奴隷主の手に渡り、そこで苦難の一生をおえる。他方、合衆国を脱出したイライザとジョージはリベリアに向けて旅立つことになる。

この物語は一方の極にアンクル・トム、他方の極にイライザとジョージという二組の黒人主人公を設定し、この両者の運命をあたかも縄をなうかのように交互に取り上げて描いている。しかも、両者のたどる運命はきわめて対照的である。当時、ケンタッキー州のような高南部の奴隷たちは「川下に売られる (sold down the river)」、すなわちルイジアナ州やミシシッピ州のような深南部の州に売り飛ばされることを極度に恐れていた。ケンタッキーのような牧歌的な高南部とちがって、深南部では過酷な労働が待ち受けていたからである。サイモン・レグレィの手に渡ったアンクル・トムは、やがて仲間の奴隷の逃亡を手助けしたという疑いをかけられ、拷問にかけられた末、悲惨な死をとげる。他方、イライザとジョージはカナダに逃亡したのち、輝かしいバラ色の夢を抱いてアフリカ大陸へと渡っていく。はるか南の深南部に売られるトムと、北のカナダを目指して逃亡するイライザとジョージというように、両者は進んでいく方向も、たどる運命もまったく正反対に描かれている。

『アンクル・トムズ・ケビン』には二つの意図が込められていた。ひとつは南部の奴隷制がいかに罪もない善良な人種を虐げているか、奴隷制がいかに非人道的な制度であるかを北部の読者層に訴えかけること、もうひとつは黒人植民の提唱、すなわち黒人は合衆国にいるかぎり、アンクル・トムのような悲惨な運命をたどらざるをえないのであって、黒人の輝かしい未来はアフリカにこそある、黒人はアフリカ大陸に送還されるべきであるという黒人植民の提唱（すなわち裏からいえば、白人共和国の理念の提示）である。ストウ夫人は一方で黒人資質を善良に描くことによって奴隷制の非人道を告発すると同時に、他方では黒人植民を唱えて、黒人の国外への排斥を推奨しているわけであり、奴隷制反対と黒人反対の思想を表裏一体のかたちで打ち出しているといってよい。黒人資質の美化による奴隷制批判と、黒人植民の提唱というこの二つの要素について、以下、具体的に見ておこう。

まず、黒人資質の美化についてであるが、ストウ夫人は小説の「序文」で、黒人は「厳格で

支配的なアングロ・サクソン民族とはあまりにも本質的に異なる性格」[22]を賦与されているがゆえに長いあいだ虐げられてきたとして、黒人と白人のあいだの顕著な差異を強調している。白人は理性的で支配者的で進取の気性に富んでいる。他方、黒人は「勇敢で冒険好きなのではなく、家庭好きなやさしい性質の持主」[23]であり、「生来忍耐強く臆病」[24]ですらある。とくに心の資質の面では注目すべきものをもっており、「正直、親切、心の優しさなどの倫理的特性にかけては、彼らは、生まれながらにして受けたあの忌まわしい影響を考える時、驚嘆に価いするほどのめざましい人々」[25]である。道徳的資質の点でみるかぎり、黒人は白人よりもすぐれた資質をもっており、キリストの教えを白人よりも率直に受け入れる素地をもっているといってよい。ちなみに、「宣教師たちの語るところによれば、地球上のあらゆる民族のうちで、アフリカ人ほど熱心に率直に福音書を受け入れた民族はないそうである。福音の根底をなしているあの信頼と絶対的信仰の根本原理が他のいかなる民族にもましてこの種族の中には、生まれながらに授けられた要素となって入っているからなのである」[26]、云々。

主人公のアンクル・トムは、こうした黒人の美質を一身に体現した人物である。トムは最初に登場するさい、つぎのように紹介されている。「顔は、いかにもアフリカ人らしい目鼻だちで、まじめで堅実な良識と、親切で情深い心とが結び合ったその表情が特に人目をひきつける。全体の様子からみて、彼にはどこか自尊と品位のある態度がうかがわれるが、しかもそれは人を信頼しきった謙譲な純朴さと結びついて見られるのである」[27]。「自尊と品位」あるいは「謙譲な純朴さ」といった言葉にうかがわれるように、サンボ型やナット・ターナー型とはまったく別個の黒人類型が打ち出されていることがわかる。

ストウ夫人はさらにトムの優れた宗教的資質をとりあげて、つぎのように言葉をつづける。「アンクル・トムはこの付近では、宗教上の事柄にかけてのいわば家長的存在であった。生まれながらにして、道徳性がいちじるしく優位を占めている性格の持主であるうえに、ほかの者たちの間に見られるよりもはるかに大きな心の広さと修養とをそなえていたので、彼らの間ではいわば牧師さまのような人物として大きな尊敬の念をもって仰ぎ見られていた。それに彼の行う素朴で、誠実で、真摯な型の説教は、彼よりもはるかに教育のある人々をさえ教化するに十分なほどであった。しかし、彼がことに卓れていたのは、お祈りであった。彼の祈りの、あの人心を感動させずにはおかぬ素朴さと、あの子供にも似た熱心さとをしのぐことのできる者は、おそらく何もなかったであろう」[28]。かつてトマス・ジェファソンは、黒人は「心の資質」の点では、学問や教養のある白人よりもいいものをもっていると述べたのであったが、トムはまさにそれを地で行く人物であり、教育はないが（そして理性面では劣っているかも知れないが）、道徳面ではひとを教化する並はずれた力をもった人物であるとされているわけである。

ストウ夫人は物語を進めていくなかで、トムが「だれの重荷でも自分から進んで背負って」やり、「すべての者に道を譲り、一番後に来て、一番少なくとり、しかもそのわずかなものさえも、必要な者には誰にでも喜んで分け与えようとする」[29]自己犠牲的な人物であり、キリストの精神を日々実践している人物であるかのように描いていく。トムの振る舞い方は死の間

際においてもキリスト的である。かれは仲間の奴隷の逃亡をかばい、サディスティックな奴隷主レグリィに拷問にかけられて、力つきる。そして、そのときレグリィを見上げて、「哀れな気の毒な人よ！あなたにできることは、もうこれまでです！わしはあなたを心の底から許します！」[30]と言って気を失なってしまう。あらゆる冷酷な仕打ちをゆるすトムの純朴な心情は、主人レグリィの獣的残忍さと格好の対照をなしている。そして他人の罪を背負い、その身代りとなって死んでいくトムは「黒いキリスト（Black Christ)」、「黒い聖パウロ」[31]とでもいうべき人物であり、宗教的美徳の化身として描かれているといってよい[32]。

アンクル・トムはチャニング、キンモント以来のプラス・イメージの黒人像を集大成するみごとな黒人類型であった。アンクル・トムは以前から出まわっていた卑屈で怠惰なサンボ型とも、また凶暴で攻撃的なナット・ターナー型とも決定的にちがったものであり、過度に美化されたプラス・イメージの黒人像であったといえる。トムはただたんに従順で、おとなしいだけの黒人ではなく、毅然とした品位をそなえた黒人であり、キリスト教倫理の手本を示すために生まれてきたような黒人である。かれは仲間の罪をかぶり、その身代りとなって死んでいく最高級の倫理的気質をひめた黒人なのであって、ナット・ターナー的な残忍さは微塵もなければ、また拷問にかけられればすぐに口を割り、目前の苦痛を避けるために反射的に嘘をついてごまかすようなサンボ的な卑屈さとも無縁である。ジェファソンは『ヴァージニア覚え書』のなかで黒人の「心の資質」を高く評価したが、それは（主人に対して）「忠実である」とか、（主人から施された恩義に対して）「感謝の念に厚い」といった点であって、いわば下僕としての美質、白人の主人にとって都合のよい資質を称賛したものでしかなかったが、ストウ夫人は品位と寛大さをそなえ、自己犠牲の精神に富んだトムのような黒人奴隷を創り上げることによって、南部の奴隷制がいかに罪もない穏和な人種を理不尽なかたちで虐げているかを描き出し、奴隷制の暴力性と残忍性をたくみに北部読者層に訴えかけたといえる。

『アンクル・トムズ・ケビン』はアンテベラム期における最大の奴隷制反対小説であったが、それと同時にこの小説は黒人植民を賛美したアメリカ植民協会の宣伝小説でもあった。この作品における黒人植民の思想は従来注目されてこなかった[33]が、ストウ夫人がこの小説を書いた目的の半分はじつは黒人植民の提唱にあったのであり、黒人植民を抜きにしてこの作品を語ることはできない。黒人排斥の思想は露骨な言葉で語られているわけではないので、そのぶんだけ分かりにくくなっているとはいえ、『アンクル・トムズ・ケビン』は合衆国から黒人を排除せよという主張を掲げた紛れもない黒人植民の書であり、白人共和国の理念を表明した小説であった。奴隷制反対の思想をアンクル・トムのたどる運命によって表明しているとすれば、黒人植民の思想はイライザとジョージというもう一組の黒人主人公にからめて展開されている。そこで以下、この後者の点について見ておこう。

小説の末尾の部分で、ジョージはイライザとともにリベリアに向けて旅立つことになるが、そのさいかれはある友人にあてて長文の手紙を書き、なぜ自分たちが合衆国を捨ててアフリカにわたるのかという理由を説明している。このジョージの手紙はじつはストウ夫人自身の黒人植民論を表明したものであり、作者は黒人主人公の筆を借りて、自分の植民思想を集約的に語

っているといえる。ジョージの手紙に現れている彼女の考え方の第一点は、黒人植民の意義としてアフリカの文明化を持ち出し、そうすることによって植民の正当化をはかっている点である。ジョージは手紙のなかで、自分はキリスト教徒の愛国者として、またキリスト教の教師としてアフリカにいく、そして合衆国で身につけた高度な白人文明と宗教をアフリカに伝えたいと表明して、つぎのように言う。「輝かしいアフリカ大陸全体がわれわれの前に、そしてわれわれの子供たちの前に、展けてくるのだ。われわれの国は、アフリカの沿岸に文明とキリスト教の潮流を導き、至る所に力強い共和国の若木を植えるだろう。その木は熱帯植物特有の速さで生長し、永遠に生い繁ることだろう」(34)、「キリスト教徒らしい愛国者として、キリスト教の教師として、僕は、僕の国へ———僕の選んだ、栄光のアフリカへ行くのだ！」(35)。合衆国のすぐれた制度文物を暗黒大陸に伝えて、彼の地を文明化しキリスト教化せよというこういう主張は、ストウ夫人をはじめとする白人の植民主義者たちの発想であって、自由黒人や奴隷のなかで、アフリカの文明化を義務や使命であると考えているような者はほとんどいなかった。否、むしろかれらの多くはリベリア行きを恐れていたといってよい。ちなみに、ストウ夫人の小説が出版される二カ月まえ、ニューヨーク州知事のハントは州議会に対して、アメリカ植民協会に資金を提供するよううながしているが、このときニューヨーク州の自由黒人はただちに集会を開いて、州がそうした出費をするのは憲法違反であり、ニューヨーク州の自由黒人のうち、アフリカに移住したがっている者は50人もいないであろうこと、そしてアメリカ植民協会が「病める世論」を生み出し蔓延させていること等を指摘して、植民路線を手厳しく批判したのであった(36)。自発的にアフリカに渡る黒人というのは、あくまで白人である作者の願望が生み出した創作にすぎなかったというべきである。

ジョージの手紙に現れている第二の点は、アメリカを「人種のるつぼ」のようにとらえておきながらも、黒人だけをそこからはずそうとする思想が見られることである。ジョージはアメリカが多様な人種の共存の場であることを表明し、「われわれ黒人は、アイルランド人やドイツ人やスエーデン人と同じように、このアメリカ共和国に伍してゆく同等の権利をもっている……われわれが彼らと席を同じくし、彼らに伍してゆく自由をもつのは当然なのだ」(37)と述べて、黒人も他の民族集団とおなじようにアメリカに踏みとどまる権利があることをいちおう主張する。しかし、かれはこの言葉につづけて、「僕が欲しいのは、国なのだ。僕自身の国家なのだ」(38)といい、アメリカに踏みとどまることを自発的に辞退し、出ていく道を選んでいる。こういう選択の仕方は黒人自身のものというより、白人である作者の願望と希望を表明したものというべきであろう(39)。

ジョージの手紙にうかがわれる第三の点は、黒人の優れた宗教的、道徳的資質はアフリカで開花させるべきであるという見解である。ジョージは黒人が将来、その資質に見合った独自の文明をアフリカに創り出すであろうという考えを、この手紙のなかでつぎのように語っている。

「僕は、アフリカ民族には文明やキリスト教の中にあってもいまだに知られていないような特性があると考えている。それは、アングロ・サクソン民族の特性と同じものではないとして

も、道徳的には、よりいっそう高度なものとなることをやがて証明することだろう。…(中略)…世界の運命は、その闘争と葛藤の開拓時代にあっては、アングロ・サクソン民族に委ねられていた。この民族のもつ厳正な、剛直な、精力的な要素は、この使命を果たすのにじつによく適していた。しかし、一クリスチャンとして、僕は新しい時代が始まるのを期待している。…僕は、アフリカの発展は本質的にクリスチャンとしての発展であるべきだと信じている。アフリカ民族は、支配的な、統轄的な民族でないとしても、少なくとも、愛に満ちた、寛大な、そして寛容な民族であ」(傍点、清水)[40]。

黒人の資質はアフリカで開花させるべきであり、かれらの優れた道徳的宗教的資質は白人文明とはちがったタイプの情愛あふれる燦然たる文明をアフリカ大陸にうち立てることになるであろうというのがストウ夫人の見解であった。アフリカはいまでこそヨーロッパの植民地支配のもとで虐げられ、踏みにじられている。しかしアフリカにはいつか将来、黒人の宗教的美質を反映したすばらしい文明が花開くときが来るに相違ない。黒人たちがアフリカに作り上げるであろう文明は欧米のそれとはまったくちがったタイプのものになることであろう。それは冷酷な白人文明とちがって、黒人の人種資質を反映した光り輝くような華やかな文明であることだろう。すなわち、「もしアフリカが卓越した教養ある民族を世界に示す日があるならば、———そしてこの人類発展の大きな劇の中で、その日はいつかきっと訪れてくるであろうが———われわれつめたい西欧の種族がぼんやりとしか考えていなかった生命が、そこに、華やかに、光り輝きながら目を覚ますことであろう。…(中略)…彼らはその心の優しさ、その謙譲な心の従順さ、より優れた心の上にいこい、より高い力の上に休もうとするその傾向、子供にも似たその愛情の素朴さ、だれをもゆるそうとするその心の寛大さによって、この啓示を必ずわれわれに示すことであろう。彼らはこうした特性のすべてによって、特殊キリスト者的生活の最高の型を教示するであろう」[41]。

ストウ夫人は自分の国をもちたいとする黒人の自発的な脱出劇のかたちで植民物語を進展させているわけであるが、黒人を主人公に据えたこの構成面での見事さは、いくら強調しても強調しすぎることはない。もし彼女が白人を主人公に設定し、白人の側から黒人植民を描いていたとしたならば、この小説の説得力は半減していたはずである。というのは、その場合には、たとえその主人公がいくら良心的な人道主義者であっても、ストーリー展開の仕方としては、どうしても黒人を出ていかせるという論理にしかならなかったはずであって、それでは北部人の良心を満足させるような説得力はもたなかったはずである。ちなみにこの小説のなかには、ジョージとイライザが白人たちに向かって、どうかアメリカから立ち去らせてくださいという台詞を繰り返す場面がいくつか出てくる。ジョージは、「私がこの国に要求したいのは、ただかまわないでほしいということだけです。そうすれば私はおとなしく出て行きます」[42]という。そして、イライザも「おお、神さま、どうぞお慈悲をくださいますよう！私たちを揃ってこの国から出て行かせて下さいませ、ただそれだけでいいのでございます」[43]といって、白人たちに懇願する。また、ときにジョージは「私はあなたの国にしてもらいたいことは何もありません。ただかまわずにいてほしいのです、———おとなしくそこから立ち去らせてもらい

たいだけです。…しかしたとえだれであろうと、この私をじゃましようという者があれば、その者は用心するがいい、私は命を賭していますからね」[44]といった強硬な言い方すらする。要するに、黒人のほうからどうでもこうでも出ていきたいと切望しているわけであって、繰り返し出てくるこの謙虚で自己規制のきいた台詞は、北部の白人読者層の耳には、願ってもないこととばかりきわめて心地よく響いたはずである。この小説が多大な共感を呼び、アンテベラム期最大のベストセラーになったゆえんである。

『アンクル・トムズ・ケビン』にうかがわれるストウ夫人の黒人植民論について、もう一、二付言しておこう。この作品は黒人資質の美化をおこなっているだけでなく、じつはこれと並んでアフリカ大陸の美化をもおこなっている。従来のアフリカ・イメージは茫漠たる砂漠と永遠の不毛性によって呪われた土地、熱病の荒れ狂う陰湿で不健全な土地といったマイナス・イメージでしかなかったが、ストウ夫人はアフリカを「黄金、宝石、香料、風にゆらぐ椰子、珍しい花、奇跡とも思われるほど豊穣な、このはるか彼方の神秘の国」[45]といったエキゾチックなイメージで描くことによって、幻想的な美化をおこなっている。そして、そこに送り込まれたら、熱病や飢えでかならず死んでしまうという陰湿で不気味な死のイメージを払拭し、自然の恵みの豊かな土地、陽光の燦々と降り注ぐ土地といった正反対の側面を強調して、アメリカ黒人がそこに行きたくなるようなイメージを創り上げている。黒人たちにアフリカへの帰還を勧めるには、また白人の支持者からアフリカ植民への寄付金をより多く募るには、こうしたイメージ転換をはかる必要性があったといえる[46]。

『アンクル・トムズ・ケビン』は全部で44の章からなりたっており、第43章では希望に胸をふくらませたイライザとジョージのリベリア行きが語られ、最後の第44章では、トムに悲惨な死に方をさせたことを悔いた元の善良な奴隷主シェルビィが、手持ちの奴隷を解放し、全員をアフリカに送還するという筋書きで物語が終結するようになっている。解放奴隷はすべてリベリアに送還されるべきであるというストウ夫人の考え方を反映したものである。またこの小説の末尾には、「あとがき」に相当する第45章「結語」が設けられており、ストウ夫人はこの章で、「哀れにも、打ち砕かれ、ちりじりにさせられた家族の生き残りの人々がつぎつぎと」[47]北部にたどりついてきていることを指摘した上で、この逃亡奴隷の扱い方について、つぎのように提案している。

「北部の教会はこれらの受難者たちをキリストの御心の中に迎えようではありませんか。教育の上からも有利な、われわれキリスト教徒の共和主義的な社会や学校へ彼らを迎えようではありませんか。そして彼らが倫理的にも知的にもある程度、成熟したならば、その時こそ彼らの手をとってアフリカの沿岸へと渡らせてやろうではありませんか。そこで彼らは、アメリカで学んだ学問を実践に移すことができるのです」[48]。

黒人を国外に除去せよという露骨で押しつけがましい言い方がなされているわけではないが、黒人植民の思想が語られていることには変わりない。小説を書き終えた作者は、ここでは黒人植民論をじかに唱えているわけである。彼女は奴隷制に反対であったが、それと同時に黒人と共存する道も望んではいなかった[49]。ストウ夫人にかぎらず、彼女の一族はすべて熱心

な黒人植民の提唱者であった。父親のライマン・ビーチャーは1834年10月にシンシナティで開かれたアメリカ植民協会の集会で、「道徳的で、勤勉で、節酒の習慣を身につけた黒人だけを選別して、アフリカに植民地を建設すること」を提案する決議案を出して、満場一致の支持をとりつけている[50]。また1851年、つまりストウ夫人が小説を新聞に連載しはじめたのとおなじ年に、彼女の弟ヘンリー・W・ビーチャー（the Reverend Henry Ward Beecher）は、わたしは黒人植民の支持者ではあるが、ただたんに黒人を送り出せばいいというものではない、「合衆国にいる黒人に対する義務をまず果たすべきである。かれらを教育し、キリスト教化せよ。そしてしかるのち、かれらを植民せよ」(傍点、原文イタリック）[51]と述べて、ストウ夫人とおなじ口調で黒人植民を訴えかけている。

『アンクル・トムズ・ケビン』の小説としての卓越性は、これが一方で黒人を美化して、最高級の黒人賛歌を奏でつつも、他方では黒人との混血や共存をはっきりと拒み、黒人植民（黒人排斥）を打ち出しているという点にある。すなわち奴隷制反対と黒人反対を表裏一体のかたちで打ち出したという点にある。当時少数ではあるが、ストウ夫人とはちがって、黒人の美化を説き、そこから人種融合を説くひとびともいた。ちなみに、1845年に「皮膚の色に関する偏見（The Prejudice of Color)」と題する論文をあらわしたアボリショニストのジェームズ・R・ローウェル（James Russell Lowell）は、黒人の道徳的宗教的資質をストウ夫人とおなじように美化した上で、白人と黒人の混血をつぎのように勧めている。「アフリカ人種は新しい文明の要素を（合衆国に――清水）注入すべく（神によって――清水）意図されているのであり、白人はより穏和でより利他的な性質を注入されることによって、大なる恩恵をこうむるであろうことは疑いをいれない。白人の精神はどんな犠牲を払ってでもつねに他人を支配しようとするところがあるので、それは服従を説き勧めるあの一見卑屈ではあるが、しかし本当はより高貴な（黒人の――清水）性質と混血することによって、はじめて美しいキリスト教的な文明の高みへと至りうるのである」[52]、と。

要するに、ローウェルは黒人資質を賛美し、そこからストウ夫人のような黒人排斥（植民）論ではなく、混血を唱えているわけであって、主張としてはこのほうが筋は通っている。ところが、ストウ夫人はいくら黒人を持ち上げ、理想的な人種として描きながらも、奴隷の国内解放を唱えたり、白人と黒人の人種融合を唱えたりすることは決してなかった。もしも彼女がローウェルのような人種平等論者と一緒になって、その黒人賛歌を混血の主張へと連結させていたならば、空前のベストセラー小説は誕生しなかったはずである。北部多数派世論の基底には「奴隷制反対」感情と同時に、これと背中合わせのかたちで「黒人反対」感情が流れていたのであり、ストウ夫人はこの両面を正確に読みとっていた。そして「奴隷制反対」と「黒人反対」の論理を基線にすえて小説を組み立てることによって、彼女は北部人の南部糾弾願望と黒人排斥願望を同時に満足させる論理を展開したわけである。建国期のジェファソンが「奴隷制反対」と「黒人反対」を合体させた立場をとったように、ストウ夫人もジェファソンとはまた別の関連づけの論理をもちいて、この両者を合体させた立場を打ち出したといえる。

最後に、外国の批評家の『アンクル・トムズ・ケビン』評を見ておこう。この作品は発表直

後から、外国の作家たちによって数々の論評を加えられたが、それらのなかでもとくに『ロンドン・タイムズ』(1852年9月3日付）に掲載された長文の書評は匿名ながら非常な力作であり、彼女の小説の特徴をきわめて適切にとらえている。この匿名の批評家は、『アンクル・トムズ・ケビン』の「顕著な欠陥」あるいは「致命的な欠陥」[53]として、二つのものを挙げている。一つは、黒人の性質を美化しすぎているという点である。アンクル・トムは右の頬を打たれたら、左の頬をもさしだす黒人であり、ひとがトムを鞭打てば鞭打つほど、トムはその者を祝福する。そして、肉体的な苦悩が大きくなればなるほど、トムの精神性もまた高揚するという描き方になっている[54]。この批評家はこうした点に疑問を呈して、つぎのように言う。われわれヨーロッパ人はこれまで、多大な労力と資金をついやして異教の地に宣教師を送り込んできた。しかし黒人がもしトムのような人種であるのなら、そういうことをする必要はなくなってしまうのではないか。むしろキリスト教の真髄について教えを乞うために、アフリカから1，2ダースの黒人を呼び寄せたほうがいいのではないか。もし黒人がそれほど優れているのなら、われわれはかれらから学ぶことはあっても、かれらに教えるべきことなどなにひとつないということになってしまうではないか[55]、と。そして、こう述べた上でこの批評家は、ストウ夫人は「アフリカ人の資質を、アングロ・サクソンの資質よりも優位に置く」べきではなかったと結論づけている[56]。

奴隷制に敵意を燃やす合衆国北部の読者はアンクル・トムという美化された黒人像をなんのこだわりもなく受け容れたのであったが、奴隷制論争の当事者でなかった外国人にとっては、なぜここまで黒人を美化しなくてはならないのかというその理由がよくわからなかったのであろう。しかし、過度な美化が施されているという指摘はそのとおりであり、外国人の批評家のほうがこうした点を的確にとらえているといえる。

『ロンドン・タイムズ』の批評家はもうひとつの欠陥として、『アンクル・トムズ・ケビン』には構成上の緊密さが欠けていることを指摘し、この点をつぎのように述べている。

「彼女は物語の構成においては月並みな才能を示しているにすぎない。彼女の語り口はコンパクトで十分まとまったものというよりは、一連のバラバラな場面をつなぎあわせたものにしかなっていない。読者のほうは二組の主人公の運命に関心をもっているのであるが、かれらに降りかかる出来事の流れは決して交わることがない。場面がアンクル・トムで終わると、ジョージ・ハリスがはじまり、ジョージ・ハリスの場面が終わると、アンクル・トムがはじまるのだ」[57]。

要するに、二組の黒人主人公の運命が全然かみ合ってはおらず、両者のあいだになんの関連もなしに物語が進められているという点を指摘しているわけである。この批評家の言うように、構成に緊密さがない、ストーリー展開がバラバラであるということも確かに言えることであり、この指摘もまたきわめて適切であるといってよい。ストウ夫人は一方で黒人を豊かな宗教的資質をそなえた優秀人種であるとみなして極度に美化しておきながら、他方でこの優れた人種を国外に排斥しようとしているわけであるから、この二つの主張が噛み合うはずはないし、それぞれの主張を担う黒人主人公の運命が噛み合わないのも当然であるといえる。ただし

かし、これは現実がそうなっているからであって、ストウ夫人の構成上の力量不足によるものではない。彼女は物語としての整合性や構成美を追うよりも、「奴隷制反対」と「黒人反対」という北部の矛盾した現実を忠実に写しとる道を選んだだけのことである。もし彼女が構成上の整合性をもとめて、黒人の美化と混血の提唱をセットにしたような物語を展開していたなら、論理の辻褄はあっていたかも知れないが、北部多数派の共感を呼ぶ作品にはならなかったであろう。

おわりに

思想史の上で、アンテベラム期（南北戦争前の時代）はロマン主義の風靡した時代として知られている。理性一辺倒で普遍的志向の強かった啓蒙主義の時代に対する反動として、19世紀前半は個別性、民族性を尊び、心情のほとばしりを賛美する風潮の高まりをみた時代であった。しかし、アンテベラム期はまた詩人ホイットマンが「実証科学万歳！」と謳ったように、科学的な実証精神の台頭した時代でもあった。ジェファソンが人間本性に内在すると見た二つの資質（理性と道徳感覚）は、それぞれこの時期に実証科学とロマン主義という二つ思潮を生み落とした。そして、この相異なる思潮に棹さすかたちで、南北戦争前夜の南部と北部には対極的な色彩をほどこされた黒人像が創り上げられることになった。南部ではアメリカ人種学派の科学者たちが頭蓋骨収集をおこない、実証的手法を駆使して黒人の「頭脳の資質」の劣等性を論証し、黒人を生来の奴隷、生来の劣等人種として描きあげた。他方、北部ではチャニングやキンモントなどの宗教家がロマン主義の上げ潮に乗って、黒人の「心の資質」を賛美する人種論を展開し、黒人こそは生来のクリスチャンであるとして、美化された黒人像を創り上げた。宗教家の創り出したこの黒人像を完成させ、血の通った小説の主人公に仕立て上げたのが『アンクル・トムズ・ケビン』である。ストウ夫人は一方でこうした見事な黒人像を作り上げておきながら、他方ではローウェルとちがって、黒人植民（黒人排斥）の主張を展開したのであり、彼女の小説の卓越性は南部奴隷制を叩く論理と白人共和国の理念とを表裏一体のかたちで提唱した点にある[58]。

注

（1）Lydia Maria Child, *An Appeal in Favor of Americans Called Africans*. (New York, 1836. Reprinted in 1968 by Arno Press.), p. 148.

（2）*Ibid*., p. 177.

（3）William E. Channing, *Slavery* (Boston : James Munroe and Company, 1835. Reprint edition 1969 by Arno Press, Inc.), p. 111.

（4）William E. Channing, *Emancipation*. (Boston : E. P. Peabody, 1840. Reprint edition 1969 by Arno Press, Inc.), p. 59.

（5）*Ibid*., p. 62.

（6）*Ibid*., p. 62.

（7）*Ibid*., p. 61.

（8）*Ibid*, p. 63.

(9) *Ibid*., p. 61.
(10) *Ibid*., p. 63.
(11) Alexander Kinmont, *Twelve Lectures on the Natural History of Man*. (Cincinnati, 1839) は入手できなかったが、ここでの所論に必要な箇所は、チャニングの『奴隷解放』の末尾の注に長文が引かれているので、以下それから引用する。またキンモントに関しては、George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind. The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817－1914*. (New York : Harper & Row, Publishers, 1971), pp. 104－107. も参照。
(12) Quoted in Channing, *Emancipation*, p. 111.
(13) *Ibid*., p. 111.
(14) *Ibid*., p. 111.
(15) *Ibid*., p. 111.
(16) *Ibid*., pp. 110－111.
(17) A. トクヴィル（井伊玄太郎訳)『アメリカの民主政治』(中)(講談社学術文庫)、357－58頁。
(18) ミンストレル・ショーについては、『マーク・トウェイン自伝』の「第12章　愉快なミンストレル・ショー」に、この時代を生きた作家の手でヴィヴィッドに描かれている。またラッセル・ナイ（亀井俊介・平田純・吉田和夫訳)『アメリカ大衆芸術物語』2「エンタテインメントの世界」(研究社出版)の第6章にも詳しい。とくに280頁を参照。史家ケネス・スタンプ Kenneth M. Stampp は奴隷制下における黒人のパーソナリティを「反逆児とサンボ」Rebels and Sambos というタイトルで論じている。Allen Weinstein, Frank Otto Gatell and David Sarasohn eds., *American Negro Slavery* (New York : Oxford University Press, 1979), pp. 228－254.。
(19) H・B・ストウ（山屋三郎・大久保博訳)『アンクル・トムズ・ケビン――奴隷の生活の物語――』(角川文庫）上巻、26頁。以下、『アンクル・トムズ・ケビン』として引用。
(20) Fredrickson, *op. cit*., p. 110.
(21) チャールズ・エドワード・ストウ［鈴木茂々子訳]『ストウ夫人の肖像　その手記による伝記』［ヨルダン社、1984年]、181、184頁)。
(22)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、3頁。
(23)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、178頁。
(24)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、179頁。
(25)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、446頁。
(26)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、354頁。
(27)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、45頁。
(28)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、61頁。
(29)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、353－354頁。
(30)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、389頁。
(31) Elizabeth Ammons, ed., *Critical Essays on Harriet Beecher Stowe* (Boston : G. K. Hall, 1980), p. 13.
(32) ストウ夫人はトムにおいて黒人の道徳的資質を美化して描くかたわら、奴隷女イライザにおいて、黒人の容姿を美化して描いている。『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、26－27頁参照。
(33) ちなみに、吉田健一訳の『アンクル・トムス・ケビン』(新潮社）では「植民論者」と訳すべきところを「開拓者」と訳しており、この作品のもっとも重要なテーマに関する言葉を完全に誤解している。吉田訳、下巻、368頁。
(34)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、423頁。
(35)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、426頁。作者は小説の「序文」では、黒人移住者によって「アフリカの沿岸に、われわれの間から学んだ法律や言語や文学」が植えつけられて根づき、

やがて「奴隷の家」(出エジプト記、第13章3節）の思い出が、イスラエルの民にとってのエジプトの思い出のようにならんことを願うと述べている。上巻、5頁。

(36) Herbert Aptheker, ed., *A Documentary History of the Negro People in the United States.* (New Jersey : Citadel Press, 1973), vol. I, pp. 329－330.

(37)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、424頁。

(38)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、425頁。

(39) リンカーンに心酔し、白人デモクラシーを賛美した19世紀アメリカの国民的詩人ウォルト・ホイットマンは、ストウ夫人がこの小説のなかで黒人主人公に託した思想、黒人に独自の国家をもたせて自立させるのが最善の策であるという思想を、数年後『デイリー・タイムズ』紙掲載の「黒人の締め出し」(1858年5月6日）という一文で、つぎのように語っている。

「白人と黒人がアメリカで人種混交することがありうると信じている人がどこにいるだろう？それを願っている人がどこにいるだろう？自然がそれに対しては越えがたい一線を画している。それに、アメリカは白人のためのものではないだろうか？そのほうがいいのではないだろうか？黒人もこの国にいるかぎり、どうして独立した英雄的な種族となることができるだろう？そのような可能性は万に一つもない。しかし、どこか安全で豊かな国に移り、進歩発展の機会を与えられて、徐々に民族を、国家を形成していったならば、世界の諸民族の中でも決して見劣りしないだけの地位を固めることができるだけのものが黒人にはあると、われわれは信じている。そうすれば、彼らもあらゆる文明諸国の善意を受けて、いやおうなく、みずからが自由で、有能で、自立心があり、力があるとみなさないではいられなくなるだろう。そういったすべてのこと、あるいはそれに近いものですらが、このアメリカにいたのでは黒人たちにとって夢物語でしかないことは言うまでもない」。V・フライマーク、B・ローゼンタール編（谷口睦男監訳)『奴隷制とアメリカ浪漫派』(研究社、1976)、65－66頁。

(40)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、425頁。ストウ夫人は奴隷制南部をエジプトにたとえている。そして「奴隷の家」からの脱出先は（北部ではなくて）アフリカである。「神の摂理がアフリカに避所を設け給うた」(下巻、446頁）のであると述べ、出エジプト記（第13章3節）の思想によってアフリカ植民を正当化している。上巻、5頁。

(41)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、325－326頁。訳は若干修正。

(42)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、343頁。

(43)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、347頁。

(44)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、209－210頁。

(45)『アンクル・トムズ・ケビン』上巻、326頁。

(46) このアフリカ大陸の美化は当時アメリカ植民協会が必死になってやろうとしていたことでもあった。ちなみに『アメリカ植民協会第34次年次報告』には、「それは太陽の国であり、熱帯の輝きと美の土地、かぐわしい花と甘美な果実の土地である。自然の美しいありとあらゆるものが、…(中略)…黒人たちをそこへと招いている」(*Thirty-Fourth Annual Report of the American Colonization Society*, p. 25.)といった言葉が出てくる。この年次報告が出たのは1851年1月21日であるが、これはストウ夫人が『アンクル・トムズ・ケビン』の連載にそなえて、資料集めをしていた時期にあたっている。ストウ夫人はこうした植民協会の文書に文学的な風味を添えてアフリカ・イメージの転換に貢献したといえる。

(47)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、445頁。

(48)『アンクル・トムズ・ケビン』下巻、446頁。

(49) ストウ夫人は黒人の権利などを真剣に考えていたわけでもなかった。彼女は南北戦争後、フロリダに移住しているが、そこで学校と教会で人種分離をおこなおうべしとする世論を彼女は肯定しているし、南部白人はそれを許さないであろうとして、解放奴隷に選挙権をあたえることにも反対している。E. Ammons, ed., *Critical Essays on Harriet Beecher Stowe*., p 132.

(50) William Jay, *Inquiry into the Character and Tendency of the American Colonization, and*

American Anti-Slavery Societies. (Originally Published in 1838 by R. G.Williams. Reprinted 1969 by Negro Universities Press), p. 68.

(51) Quoted in G. M. Fredrickson, *Black Image in the White Mind*, pp. 115－116.

(52) William H. Pease and Jane H. Pease, eds., *The Antislavery Argument*. (New York : The Bobbs-Merrill Company, INC., 1965), p. 314.

(53) E. Ammons,ed., *Critical Essays on Harriet Beecher Stowe*, pp. 27, 29.

(54) *Ibid*., p. 27.

(55) *Ibid*., p. 28.

(56) *Ibid*., p. 27. チャールズ・ディッケンス（Charles Dickens）もストウ夫人にあてた手紙の中で、彼女の小説を賞賛しつつも、その唯一の欠点はアフリカ人種を偉大な人種として、美化しすぎたことであると述べている。*Ibid*., p. 151.

(57) *Ibid*., p. 26.

(58) アメリカ史上、美化された黒人イメージが出てくるのはアンテベラム期という特殊な一時期だけであり、このイメージはセクショナリズムの激化が生んだ特殊な産物であった。北部人がアンクル・トムを必要としたのは南部の奴隷制が存在していた時期、それもアンテベラム期という特殊な一時期だけであって、奴隷制が消滅したあとは、このイメージは必要なかった。ちなみに、『アンクル・トムズ・ケビン』は南北戦争以後（すなわち奴隷制の消滅後）絶版になり、1948年に叢書「モダン・ライブラリー」に加えられるまで、古本屋でしか手に入らない代物になってしまう。（本間長世『理念の共和国』[中公叢書、1976年]、112頁)。リンカーンの手によって奴隷解放がおこなわれ、奴隷制が消滅してしまうと、理想化された黒人像などというものはむしろわずらわしい以外のなにものでもなかった。アンクル・トムの殉教者的な姿勢が北部白人を感動させ、共感を呼んだのは、あくまで奴隷制あってのことであり、この小説の役割りはリンカーンの奴隷解放によって完全におわったといえる。アメリカ白人はアンテベラム期に戦術として創り出した黒人イメージに、戦後になってまで固執する必要はなかったわけである。

（原稿受理　1999年12月２日）